



ブックレビュー

久保庭真彰 著

『ロシア経済の成長と構造』

——資源依存経済の新局面——』

発行元◎岩波書店
発行年月◎2011年1月
総ページ数◎248ページ
価 格◎5250円(税込)



本書は、長年ソ連および新生ロシアの経済を、厳密な統計的基礎づけのもとに分析してきた久保庭教授の最新著作である。

本書の類書にない特徴は、「代理生産性」「交易利得」「総要素生産性」「コーホート要因法」といった概念や手法（一部は久保庭教授が独自に再定義・考案したものである）を援用した、高度に理論的なアプローチによってロシア経済を解析している点にある。しかし、ここでのアプローチは、近年の経済学研究論文によくみられる「理論のための理論」「こけおどしの数学的方法」とは一線を画するものである。

まず、解明すべき現実的問題があって、その解明のためにぜひとも必要な場合に初めて、「理論」や「方法」が援用されるのである。したがって、本書で著者は、統計学的な「検定」の手続きをシツコクやってみせるようなことは、基本的にはせず、重要な結論だけをざっくりと提示している。ひとつの見識といえよう。

本書の最も重要なメッセージは「ロシア経済はロシア病に陥っている」というものである。ここで「ロシア病」とは、「オランダ病」からの連想で久保庭教授が作り出した造語である。オランダ病とは、1970年代初めにエネルギー価格

の高騰によって、ガス輸出国として大幅な経常収支黒字を獲得したオランダで、その黒字が今度はオランダ通貨ギルダーの為替高を招き、その結果、国内製造業の停滞と国内経済のサービス化が生じたことを指す。

久保庭教授によれば、これに対してロシアでは、油価の上昇、石油・ガス輸出収入の著増が必ずしも国内製造業の停滞には結びつかず、油価の上昇とGDP上昇とに明確な正の相関関係があったという。もちろん、このような事態はそれだけでは「病」とはいえない。しかし、この構造がロシア経済にビルトインされている結果、ロシアはジレンマに陥っているというのが著者の診断だ。ロシアにとっての中長期的な課題、すなわち、産業構造の多様化、エネルギー依存経済からの脱却を実現するためにも、油価の高騰・高止まり、石油・ガス輸出収入の継続的確保が必要であるというジレンマがそれである。これを指して著者は「ロシア病」と名づけた。

「ロシア病」診断に当たって、重要な役割を果たした概念が「交易利得」と「総要素生産性」である。前者は輸出品の「名目」価格の上昇（下落）がGDPの「実質」値の上昇（下落）につながっていくメカニズムを所得側から解き明かすキー概念であり、後者はロバート・ソロー

以来のいわゆる成長会計の中で、経済成長の原動力のひとつとされる供給側の概念である。

経済成長論のオーソドックスな枠組みである後者はともかく、前者による分析は久保庭教授の大きな貢献である。専修大学の作間逸雄教授を数少ない例外として、わが国ではほとんど注目されてこなかったこの概念を、いわば「再発見」してロシア経済分析に適用したからである。

そのほか本書には、本来はGDPの控除項目である輸入が商業の活況を通じてGDP成長につながる構造を明らかにした箇所（その背景には商業部門の肥大があり、それ自身が「ロシア病」のひとつの発現形態である）、久保庭教授が得意とする産業連関分析、その応用としてのスライライン分析によってロシア、日本、ノルウェーを比較した箇所、ロシア側の人口統計を用いてゴールドマン・サックス社のBRICsレポートを再検証した箇所など、興味つきない分析があふれている。

研究者のみならず、ロシアに関心をもつ実務家・学生も、膨大な統計数字や数式におじけず、じっくり本書を読むならば得るところは大きいであろう。

(西南学院大学 経済学部
国際経済学科 教授 上垣 彰)